新村出全集

第十卷

筑摩書房

新村出全集第十巻

昭和四十六年十一月三十日　第一刷発行
昭和五十二年　五　月三十日　第二刷発行

著　者　新　村　出

担当編者　小　葉　田　淳
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行者　井　上　達　三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発行所　筑　摩　書　房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(〇三)七六五一(代表)
振替　東京　六―四一二三番

印刷　多田印刷株式会社
製本　矢嶋製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

史伝考証篇Ⅱ　目次

船舶史考……7

初版序9　再刊本題言10

船の丸号11　八幡船考33　蘭船エラスムス丸と貨狄舟48　増訂82

紅毛船の遺物貨狄像91　カテキ存置論97

南方記抄……99

序101

日本人南方雄飛の歴史103　日本人南進史と南洋文学117　南方語・地名・国名136　南方仏蹟史瑣談142　真如親王奉讃147　日本人の南進第一人者と京都151　真如親王の御事蹟157　真如親王の御遺蹟について175

日の本と遠つ南181　江南と日本183　上海雑記190　広東雑記195　日本人と海南島附近201　マレーの虎206　朝顔の故郷は南洋212　ジャワ懐古217　じやがいもの話219　スコール、ジャングル、バンド223

『新嘉坡の背後英領マレーの秘境』序文 225　『八幡船史』序文 227

遠西叢考……229

自序 231
明治以前洋画の源流 232　貨狄像伝来径路の想定 249　日本と暹羅との貿易につきて 257　タウンセンド・ハリスの一私信 263　那翁戦争の反響 270
西教徒の管見に入つた戦記文 275　尾州吉利支丹の源流 278　九州吉利支丹史蹟大観 281　名古屋蘭学史談 289　京都に於ける西洋文明 295　西洋文化と大阪 316　往古に於ける上海と日本との史的関係 338　元治元年に於る幕吏の上海視察記 344

聖徳太子御年譜……377

別篇並に単行本未載篇……441

桓武天皇と共に平安京をつくつた人 ―平安文化の先駆者清麻呂公と護王神社― 443
日本文化史上に於ける伝教大師 449　求法の大聖真如法親王 471　真如親王御年譜備考 476　裔然上人を憶ふ 482　成尋法師の入宋とその母 487　南

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

京古塔の新発見を慶ぶ—日本禅僧中興の事—494　泉南宗仲論師補考497　西征求法歌集499　続西征求法歌集509　日唐和歌抄517　異域研究者としての新井白石521　東涯先生とその門下525　慈雲尊者伝記資料532　京都市と宣長翁544　京都尊攘堂の由来555　旧時代の日本文化に及ぼせる西洋の影響557　日本人と太平洋572　日南古俗の一致587　恵州と日本人590　野之口隆正の「詠浜田弥兵衛事歌並短歌」592

解説……小葉田　淳

新村出全集　第十巻　史伝考証篇Ⅱ

船舶史考

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

初版序

この書は、予が近年世に著はしし船舶の名称に関する史考三種をあつめて増補を施したるものにして、実は船舶名称漫考三篇とも題すべかりしなり。いま便に循ひて「船舶史考」と名づく。たゞこれ一の「釣船にてさふらふ」のみ。

題簽は藤井紫影博士に請ひ、装幀は中川修造画伯に嘱し、併せて拙著を飾るを得たるは幸なり。口絵の料を長崎の武藤長蔵教授より贈られたると共に、記るして以て感謝の意を表す。表装の意匠はアッシリヤの古瓦により、外箱の構図はエヂプトの古画にもとづく。口絵は『一五九八年至一六〇〇年阿蘭陀船隊墨瓦臘尼海峡通過南米日本航行記』第一冊（一四頁）中の挿画によるものにして、画面の下段右方なる一船こそ、エラスムス丸改めリーフデ（慈愛）号のすがたなれ。

最後に、更生閣主人がこの書の体裁につきて意を尽くししことを特記すべきはさることながら、この浅薄なる小著が果して「誓の船」たるに適すべきかいとおぼつかなし。主人それ「釣船と見てさふらへばこそ」といふや否や。

昭和二年四月二十九日　今上天皇御践祚後最初の天長節の日

京都小山の住居にしるす

新村出

再刊本題言

『船舶史考』の初刊は、昭和二年の春であつたから、もはや十六年昔のことになる。海外の異聞、船舶の史話、共にわたくしの考察と興味とをそゝつて、幾多の小論文を成さしめ、何冊かの随筆集を編ましめたが、現時わが南方進展の勢と船舶新造の声とが、益々昂まりつゝあるに際して、十六年前の旧著がこゝに新意義を賦与せられて新装上梓せられる機運に際会したのは、驚異し且つ感激せざるを得ぬ。たゞし増訂を施こすべき部分のあちこち存するにも拘はらず、印刷上の都合や紙面の節制などを顧慮して、誤植の訂正にとゞめておいたのは、致方ない。わたくしの本邦船史感興はなかなか尽きさうもないが、わが綱手の力弱さを嘆ずるばかりである。

昭和十八年紀元節

京都小山居

新村出

船の丸号

御祓をのぼりの先へ結付
何丸彼丸無事に川口　（『誹諧当世男』）

『義経記』巻第四に「義経都落ちの事」と題する一章がある。日本の海洋文学のうちでは誦すべき文章であるが、いま日本文学大系本によると、第十三巻の五三六頁に次のやうな重要な一節が出てくる。

以上其の勢一万五千余騎なり、西国に聞えたる月丸といふ大船に五百人の勢を取りのせて財宝を積み二十五疋の馬ども立てゝ四国路を心ざす。

とある。事柄は文治元年十一月のことであるが、『義経記』の創作は、室町時代の初期か中期までであるらしいから、右の文句も文治以後二三百年のころのものとせねばなるまい。山岡明阿弥が『類聚名物考』の「船車部」第二に於て、この月丸をば、「案ずるに舟に名付る事尤ふるし」と云つたのは、多分船の名に丸の字をつけた例では一ばん古いといふ意味であらうが、それはその命名が鎌倉時代の初めにあると解してはならないことは勿論である。『義経記』製作年代の室町初期までにそのことを引きさげておかなければならないのは亦いふまでもない所である。

私が見た所で、船の丸号が見えてゐる文献の最も古いのは、応永時代の文書である。(一) 即ち足利義持が将軍のときのものであつて、その一はまだ義満が在世のころ、日明使節の往来があつた時分の文書で、応永十一年五月二十五日附、義持の御教書に見えるのである。それは将軍家の直轄に属する御用船の名称として、御所丸、御座丸、八幡丸

の三隻が出てゐる。同年幕府は春日神社及び興福寺の造営料として、兵庫河上諸関の舟の関税を寄附するために、それらの寺社の造営がをはるまでは、これらの御用船を除くの外、その他の過書船すなはち関舟、いはば従来特許状を得て関税免除を受ける船舶の特典を停止しようとしたのであつた。(二)

第二の例としては、応永十九年、その年にはスマタラ島の或港から来た南蠻船が二度目に若狭に来航した年であるが、その年の六月と十一月との『大友文書』に見える過書船の名に春日丸といふのがある。その一通には「大友殿春日丸船壱艘荷足千五百石」と出てをり、他の一通には「大友修理権大夫入道祖孝舟壱艘春日丸事云々」と書いてある。大友入道祖孝とは、外国貿易で名を著はしてゐる持直の父になる親世のことであつて、筑紫の豪族として足利氏無二の味方である。その春日丸が兵庫の両関と河上諸関との過書を得たことは翌年の二十年四月、翌々年の七月の文書にも存する。

応永十年代は明の永楽の初年代にあたり西暦の第十五世紀の初にあたるが、その時代に船の丸号が文献にみえはじめるのである。応永年代に見えるとすれば、丸号の起源はもつと古いに違ひない。少くとも応永に接続する南北朝には丸号があつたと見てよからう。或は更に遡つて鎌倉時代に起つたと考へることが出来るであらう。問丸が鎌倉末期から南北朝にかけてその名を文書にあらはしてゐるが如く、船の丸号も同じやうな時期の文書記録に見出され得るに至るかもしれないと思ふ。

義持時代の将軍の御用船のうちに八幡丸の名をみとめたのは、応永十一年であつた。それから約三十年後の永享四年のことであるから必ずしも同一の船であるとは断定出来ないが、或は別の船ではないかとも思はれるが、『満済准后日記』の同年六月三日及び五日の条に、八幡丸といふ船の名が出てゐる（同日記永享六年六月廿四日の条に小泉丸の船の名が見える）。「唐船事大略今日治定了、寄合（八幡丸号船也）船事云々」と六月三日の日記にある。五日のには、八幡丸船頭方へ銭七万疋をもつてゆくといふ事が書いてある。瀬戸内海の通航船ではなくて外洋に遠航する大船である。永享四年は明の宣徳七年（西紀

一四三二年）にあたるが、それより三十年後の応仁の頃になると、丸号の船はますます多く文書記録に見えてくるのである。

宝徳二年十二月三日（景泰元年、西紀一四五〇年）の『東大寺文書』によるに、正米二百四十余石を御寺に納めるために運漕して兵庫に着津する竈戸の関船薬師丸の名があり、五年経ての享徳四年すなはち康正元年の五月の文書二通にも薬師丸が同様の役目を演ずることがみえてゐるし、更に十数年後の応仁二年正月の『東大寺文書』にも、「薬師丸年貢算用状」が存する。さて竈戸関とはすなはち周防の上之関のことであるが、こゝは大内氏の海関として名高かつた処である。『戊子入明記』には上関薬師丸として渡唐船としてあらはれてくる。この船は渡唐船として五百石または七百石と出てゐる。

『戊子入明記』とは、応仁二年戊子、すなはち明の成化四年（西紀一四六八年）に、建仁寺の天与清啓和尚が、再び幕命を奉じて、遣明正使として僧俗百余人を率ゐて渡航したときの記録である。随行の禅僧中には有名な桂庵玄樹もまじつてゐた。これより十数年前の享徳三年（景泰五年）の入明のをりにも、天与清啓は従僧を勤めたが、応仁の時の勘合百枚中、三枚を使つて、一枚は一号船なる豊前の門司の和泉丸にあてられ、それには公方様の御船として渡唐することとし、一枚は二号船なる同じく門司の宮丸にあてられ、それには細川右京大夫殿の御船として渡唐することとし、一枚は三号船なる同じく門司の寺丸にあてられ、それには大内新介殿の御船として渡唐することとして、この和泉丸と宮丸と寺丸との三隻が渡唐勘合船に割当てられた次第であつたが、後に示す船舶表によるときは、その外八隻と、その他別表にはなほ二三隻の丸号の船とがみえてゐる。この時の将軍は義政であり、細川氏は勝元、大内氏は政弘であつた。さて『戊子入明記』のうちに、「可成渡唐船分」と題する船名録があるから、今それを参考に抄出する。

豊前門司　和泉丸　二千五百石、是は大船にて不渡唐也、

同　寺丸　千八百石、此寺丸も大船にて度々及難儀也、

同　　宮丸　　千二百石、是は無子細也、
周防富田　　弥増丸　　千石
同　上関　　薬師丸　　五百石
同　深溝　　熊野丸　　六百石
同　楊井（ヤナイ）　　宮丸　　七百石
備後尾道　　住吉丸
同　鞆　　宮丸　　千石
同　田島　　宮丸　　七百石
同　院島　　熊野丸　　六百石

なほ別表によると、寺丸以下八隻の外に、門司の夷丸と牛窓の田原丸と上関の夷丸との三艘が丸号に見える。而して「戊子入明廩給」を検すると、改め一号船の寺丸の乗船人数が百五十人で、その廩給が二百三十三石余と算せられる。ともかくも、戊子の入明船は、最初の予定が変更されてゐるのである。上に抄出した船名簿のうち富田の弥増丸の名は、京都大学所蔵の「富田公用米送進状」と題する応仁二年十一月二十八日附古文書にも見える。やはり米運上の船が兵庫着岸についての送状である。

以上が私のしらべた足利時代中期以前の丸号船舶の実例である。(三) すなはち応永応仁にわたる六十五年間の用例であつて、明の永楽成化間をふくむ西紀第十五世紀の約三分の二に及んでゐる。この前後の時代乃至この年代間における他の用例については、向後の増補を自他に期待することにしよう。然し、若し仮りに以上の、乏しき而も多少偏頗な材料から得た実例によつて観察を下すと、応永時代に於て、御所丸御座丸などの丸号と、八幡丸春日丸などの丸号とが、両々相行はれてゐたのであるが、それらは、みな将軍家や九州の豪族の所有にかゝるものであるから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com